

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	中国	
学校名	静岡英和学院高等学校	氏名	武井明	学年	高2

2025年夏に実施した中国・内モンゴル自治区オルドス市における1か月間の留学について、その内容と成果をまとめた。留学のテーマは、「自然と共生する文化を学び、それを映像化し、静岡の人々に伝えること」であった。草原と家畜、モンゴル民族の暮らしが色濃く残るこの地域において、「無駄を出さない暮らし」や「恵みに感謝するとは何か」という問いを、自身のルーツをたどりながら探究した。

現地で特に印象的であったのは、伝統文化が特別なものではなく、日常の中に自然に存在している点である。週に一度行われる民族ダンスは観光向けではなく、地域の人々が自発的に集う場であった。また、血縁を中心とした交流の中で郷土料理を共に作るなど、文化が世代を超えて受け継がれている様子が見られた。さらに、伝統楽器とポップ音楽の融合や、民族衣装の現代的なアレンジといった工夫により、若い世代にも伝統が受け入れられていると感じた。

留学を通して、「恵みに感謝する」という行為についての認識が大きく変化した。留学前は感謝しているつもりであったが、内モンゴルでは、資源を最大限に活用し、別の形で循環させ、最終的に自然へ返すという実践が行われていた。羊は肉だけでなく、乳、皮、骨に至るまで使われ、廃棄されるものはほとんどなく、次の営みへとつながっていた。これは、地球の循環を滞らせない暮らしであると感じた。



日本と内モンゴルの共通点として、侘び寂びに通じる価値観が挙げられる。生活の中に質素な美しさを見出す感性が共通している。一方で相違点は、自然環境への向き合い方である。厳

しい寒さの中で生活してきた背景から、乾物など保存性の高い食文化が発達し、多くの知恵が蓄積されていた。日本では利便性の向上により、「作る」「育てる」といった過程が見えにくくなっている。そのため、食べ物や資源が自分の元に届くまでの背景を知ることの重要性を強く実感した。

留学中はドキュメンタリー制作にも取り組んだ。短編では「日常にある自然の恵みの美しさ」を、長編では「伝統とともに生きること」をテーマとした。映像は言葉を超えて想いを伝える表現手段であり、撮影を通じて、これまで見過ごしていた暮らしの価値に気づくことができた。制作した作品はコンテストに応募し、受賞することができた。今後はYouTubeでの公開も予定している。



そのほか、農業見学、乳製品ビジネスを行う夫婦への取材、馬頭琴の演奏会への参加などを行った。学生交流では、静岡茶染めやかるとを通じて日本文化を紹介し、互いの文化を尊重し合う対等な交流の機会となった。

留学を通して、日記を書くこと、生活の手伝いをすること、手作りのギフトを渡すことの大切さを学んだ。一方で、語学準備や時間管理については課題も残った。しかし本留学を通じて、「自然と共に生きるために社会で活躍できる人になりたい」という新たな目標を見出すことができた。

以上より、本留学は「恵みに感謝する」という概念を実感をもって理解する機会となった。動物と人が共に生き、共に成長する暮らしには、効率だけでは測れない豊かさが存在することを学んだ。

